



Title	ヴェーダ文献における mitráṃ as/bhū : idám bhū 構文に合致する表現として
Author(s)	都築, みのり
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2022, 56, p. 31-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94856
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴェーダ文献における *mitráṃ as/bhū*

— *idám bhū* 構文に合致する表現として —

都 築 み の り

キーワード： *mitrá-*／同盟；契約／ヴェーダ文献／*idám bhū* 構文／Inhaltsakksativ

1. 研究の概要

古代インドの言語サンスクリット語、そしてその最古層言語ヴェーダ語で編纂された祭式文献群であるヴェーダ文献群では、一般に *idám bhū* 構文と呼ばれる表現が見られる。これは名詞 A（主格）＋中性名詞 B（主格／対格）＋動詞 *bhū/as* 「なる／ある」からなる構文であるが、構造的にも意味的にも通常の述語名詞構文（「A は B である／になる」）によっては説明し難い特殊表現である。その文法構造や意味、また個々に用いられる中性名詞 B の用例やその広がりについては長らく不明な点が多かったが、近年、議論と理解が大きく進みつつある。本稿ではこれを受けて、*idám bhū* 構文のうちで中性名詞 B として「同盟；契約」を表す名詞 *mitrá-* を用いる表現 *mitráṃ as/bhū* を取り上げ、ヴェーダ文献の範囲において用例を網羅的に収集し、検討した。その結果、*mitráṃ as/bhū* が *idám bhū* 構文の一つであり、「A（主語）が（誰かとの）同盟に属する状態である／になる」を意味すること、そして中性名詞 B が対格として理解されるべきであるという近年の研究結果を再確認するに至った。また本研究を通して、一般名詞 *mitrá-* には、「契約相手を傷つけないこと」が含意されていることも明らかになった。

2. *mitrá-*について

一般名詞としての *mitrá-* は、ヴェーダ語においては男性名詞として「同盟者」を、中性名詞としては「同盟」を表す。*mitrá-* は友情を伴った関係というよりも、同盟による契約的な仲間関係であり、男性一般名詞としても「(同盟の結果の) 同盟者」等の意味が想定される。¹⁾ ヴェーダ文献以降においても、*mitrá-* の派生語として仏教における慈悲の慈 (*mettā-*) があることなど、後の思想的展開を考える上でも重要な単語・概念である。

固有名詞である Mitra「ミトラ」は上記一般名詞としての *mitrá-* を体现する「同盟：契約」の神として、紀元前 1200 年頃成立したインド最古の神々への讃歌集リグ・ヴェーダ (*Rg-Veda*) から登場する。インドと共通の言語・文化的背景を持つイランでも、対応する神ミスラ (*Miθra*) の存在が確認でき、ミトラはインド・イラン共通の時代から信仰されていた神だと考えられる。元来は王権の一側面の神格化と考えられ、誓戒の履行などを監視する神ヴァルナ *Varuṇa* としばしば並び称され、二神一組として描かれる。

RV の後は、祭式儀礼やマントラ (祝詞、祭詞) の規定、またそれらの意義や由来を説明するブラーフマナ文献 (*brāhmaṇa*) を始めとするヴェーダ文献群、更に後の叙事詩等でも登場するが、目立った活躍をすることは少ない。加えて、RV 以降の文献では、並び称されるヴァルナが恐ろしさ・厳格さといった側面を強調される一方で、ミトラはその相補的なものとして、RV では明確に描かれていなかった優しさ・明るさと言った属性を担うことが増えていく。²⁾ 仏教文献においては、帝釈天として取り入れられたインドラ神等とは異なり、ミトラそのものの名が現れることは無い。RV においてさえ、ミトラだけに言及している讃歌は 1 篇しか存在せず、それ以外ではヴァルナと一組で描かれることが多く、ミトラに対してだけの言及を抜き出すことは困難である。後の *br.* や叙事詩においても、ミトラに割かれる言葉は他の神と比べ少ない。このようにミトラの研究資料は乏しく、神ミトラの研究は、もっぱらイランで同一視されている神ミスラとの比較や、一般名詞

mitrá-の語義の考察によって行われるのが現状である。

3. *idám bhū* 構文とは

idám bhū 構文の名の由来となった表現 *idám bhū* は、1 で見た通り、中性名詞の主格＝対格形 *idám* と動詞 *bhū* 「生じる；～になる」または *as* 「存在する；～である」からなる構文であり、通常の名詞述語構文とは異なる特殊な表現と考えられる。

idám bhū 構文の構造理解において、最も重要であるのは「中性名詞 *idám* が主格なのか対格なのか」という点である。ヴェーダ語の中性名詞は主格と対格の曲用形が同じ形になることから、動詞 *as/bhū* がコピュラであり、上記の特殊な意味があくまで主語＝述語（主格）の意味関係から発展したものとするのか、それとも動詞の意味や格形に他の可能性（対格）を想定すべきなのかが、議論の焦点となってきた。

idám bhū 構文に関して議論の発端となったのは、PW による *bhū* と目標・目的地を表す *acc.* が結びついた際の「*acc.* に入り込む；*acc.* に到達する」という意味設定を受けた、Gaedicke (1880: 150-154) の議論である。Gaedicke は *idám bhaviṣyati* における *bhū* は、通常の「繁栄する」の意味で、また *rāṣṭrám* 「支配権」+ *bhū* を含む多くの例における実体詞は主格述語として読むことが出来るとした。一方、Gaedicke は *idám, rāṣṭrám* と *as* については触れていないが、後に見る *Inhaltsakkusativ* と *as* のシンタクスを認めているようである（同書：165）³⁾。Delbrück (1893: 370-371) は存在動詞と *acc.* が結びつく事例を取り上げる中で、*rāṣṭrám bhū* に関して上記 PW の訳を参照しつつも、主格か対格かの判断を保留している。また RV においては *as/bhū* と結びつく際に *acc.* が副詞的な意味で現れることはない点を指摘している。

Hoffmann (1976: 557-559) は *idám bhū* という表現を中心的に取り上げ、これによって *idám bhū* 構文が広く知られることになった。彼はそれまでの研究成果に鑑み *idám*（及び *rāṣṭrám*）は主格述語であるとの結論を出してい

る。Hoffmann はまず、上記 Gaedicke と同じく *rāṣṭrām bhū* における *rāṣṭrām* を主格述語として考え、*bhū* と *as* との補完関係に基づき、*rāṣṭrām as* も同様に理解する。また、*rāṣṭrām bhū* と比較できる構文 *xša θ rəm bū* がイラン側のアヴェスタ語に見られることから、これがインド・イラン共通時代にさかのぼる古い構文であることも指摘する。加えて、*rāṣṭrām bhū* が *idám bhū* と近しく関連している事例に基づき、時間の経過と共に *idám rāṣṭrām bhū* 「この地上の支配権に到達する」⁴⁾ の省略表現として *idám bhū* が使われるようになったと結論付ける。

一方で後藤 (2007: 809-805); Gotō (2008: 115-125) は、*idám bhū* 構文において、見つかっている用例が事実上中性名詞との結合に限られるため、*idám* は主格と対格どちらとしても考えられることに触れる。加えて、特に法律・社会制度に関連する表現が多いことを指摘し、インド・イラン共通時代に遡る古い構文であるとする。後藤は *as/bhū* を一体の物として捉えた上で、*as* が主格以外の格とも結びつき得ることを指摘し、*idám* は主格述語ではなく、Inhaltsakkusativ である可能性を指摘する。Inhaltsakkusativ 「内容の対格」とは、典型的には同族目的語によって表されるような、動詞の意味内容そのものを具体化・限定して表示する機能の対格である⁵⁾。そして上記 Hoffmann が *idám as/bhū* に対して上げた訳を受け、「～を管轄・支配している [as] / するようになる [bhū]」⁶⁾ という、より一般化された解釈を提示した。後藤が注目したのは、*idám bhū* 構文において、コピュラ文の特徴である「動詞が主語でなく述語名詞の数に一致する」現象が見られないという点である (→本稿 5.1 ①、②等)。つまり、*idám* は主格ではなく、よって *as/bhū* がコピュラでないという前提に立つと、*as/bhū* は本動詞として「～がある (～が存在する)」「～が生じる」として、そして *idám* は Inhaltsakk. によって最もよく説明しうる、という理解である。後藤は、*idám* が副詞的な対格として使われている可能性は排除できないとしつつも、これまでに見つかっている *idám bhū* 構文の多くは、*idám* を Inhaltsakk. として解釈できる見込みがあるとする。

Amano (2009: 39-43) は *idám bhū* について、Hoffmann の考えに対し、まず *idám* と *rāṣṭráṃ* の組み合わせが韻文文献には出るものの散文においては見られないことなどから、*idám* は *idám rāṣṭráṃ* の省略表現とは言い切れないと結論付ける。この前提の下、Amano は上述の後藤；Gotō と同様に、*idám* が副詞的用法の対格などでもある可能性を指摘し、① *idám* は述語ではなく主語である、② *idám* は（道や方向を示す）副詞的用法の対格である、③ *idám as/bhū* はコピュラ文ではなく、*as/bhū* は本動詞として「～がある」「～が生じる」である、という三つの可能性を考えている。特に③について、Gotō (2002: 25, n. 6) での議論を参照し、これは *as/bhū* がコピュラ動詞として成立する以前の古い使われ方なのではないかと指摘する。なお、構造的には、②と③は *as/bhū* を存在動詞として見る点で同じであろう。また①と③は、理論的には可能であろうが、構造理解と（翻訳に見られる）意味の現れ方が妥当かどうか、また *mitráṃ* を含め様々な名詞を伴う例においても適用可能であるかどうかについて、議論の余地が残る。一方で、Amano は *Inhaltsakk.* としての *idám* の可能性には言及していない。

以上が、これまで *idám bhū* 構文についてなされてきた主な研究である。

4. *mitráṃ as/bhū* について

4.1 *mitráṃ as/bhū* の研究史

上述の後藤が指摘するように、*idám bhū* 構文の *idám* には、広く法律・社会制度関係の中性一般名詞が用いられている。今回扱う中性名詞 *mitrá-*「同盟」を用いた *mitráṃ as/bhū* は、ヴェーダ文献の範囲内で筆者が収集した結果、現在までで15例見つかった。一方、最も古いRVでは見つかっておらず、ほとんどの用例がbr.に見られる点は注目に値する。

これまでの研究では、そもそも *mitráṃ as/bhū* を特殊な表現として想定している研究はほとんどなかった。その中で、Gotō (2008: 118) は、実際に *mitráṃ as* の形が現れる TS II 5,2⁷⁾ を例として挙げ、中性名詞 *mitrá-*「同盟；

契約」も法律・社会制度関係の単語であり、*idám bhū* 構文に用いられる語の一つとして数えている。西村（2006: 156）も、TS 同箇所を *idám bhū* 構文として訳している（「牛 [というもの] はすべての事柄の契約を司っているのだ」）。一方で、当箇所や関係個所に対する多くの先行訳や先行研究では、*mitráṃ as/bhū* に *idám bhū* 構文による表現の可能性は想定しておらず（知られておらず）、例えばミトラを含めアーディティヤ神群の性質について研究を行った Brereton（1981: 57）などは、構文に合致する可能性が考えられる箇所において単に「ミトラはすべての者の友人だからだ」と *mitráṃ* を男性名詞の主格述語 *mitráḥ* であるかのように訳している⁸⁾。このように、これまで構文の可能性を指摘されなかった箇所が相当数ある。筆者は、それらを集・検討した結果、以下 5.1 で示す根拠からそれらが *idám bhū* 構文に合致する *mitráṃ as/bhū* という表現であり、その際、*mitráṃ* が *Inhaltsakk.* として機能していることを明らかにした。また、それらの再検証を行った結果、当該箇所を含むテキストの内容そのものの解釈にも大きな変更を迫るものとなった。

4.2 *mitráṃ as/bhū* の用法と意味

idám bhū 構文である *mitráṃ as/bhū* は、用例検討の結果基本的に以下のような用法を取る。

- ・主語が対象 (*gen.*) との同盟に属する (*as*) / 属するようになる (*bhū*)⁹⁾

上記の *idám bhū* 構文の理解と本稿 5 に見る実例に基づけば、*mitráṃ as/bhū* の構造は、以下の様に理解される。まず、*mitráṃ as/bhū* の用例において、男性または女性の実体詞が主語であり、*mitráṃ* が主格述語だとすると性が一致しないばかりか、意味としても「主語は（抽象的な）同盟関係そのものである」となり、意味をなさない用例が複数見られる。最も重要であるのは、後述の用例①、②に挙げる、前述の後藤が指摘した、*mitráṃ* と動詞の数が一致しない用例が存在することである。

一方で、文法的には *neut. sg. acc.* は、後藤（2007: 807）; Gotō（2008: 121）

が指摘しているように、副詞として使われている可能性も否定できない。Hoffmann (1952: 42-45 = 1975, 1976, 1992: 339-349) が挙げている様に、副詞と *as, bhū, kr* を用いて「adv. の状態である、になる、にする」を表す述語的副詞の用法がヴェーダ文献においてしばしば見られるからである。Hoffmann は例として、adj. *arám* 「正しく、適切に」や、時期や期間を表す副詞と *as, bhū* の繋がり（例えば adv. *dívā* 「昼に」であれば *dívā bhū* 「昼になる」）を挙げている。ここで *mitráṃ* と同様に、実体詞の中性主格・対格に由来する副詞に特に注目すると、例えば *nāma* や *kāmam* が挙げられるだろう。しかしながら、これらは動詞の動作からは独立して、動作をあくまで追加的に修飾する副詞である。*mitráṃ* に同様のやり方で *as/bhū* を修飾する用法は考えがたく（「友好的に、同盟者であるように」？）、*as/bhū* とともに用いられて初めて意味をなす、いわば複合表現 (*idam bhū*) である。これは、Gaedicke (1880: 156) が端的に触れている *Inhaltsakk.* の性質と一致する。

これらの理由から、後藤が指摘するように *mitráṃ as/bhū* は名詞述語構文とは異なっており、その場合 *mitráṃ* を *Inhaltsakk.* として考えるのが最も自然であろうと判断される。その場合 *mitráṃ as/bhū* は、後藤 (2007: 807) が *rāṣṭrám as/bhū* (*idám bhū* のヴァリエント) に対して「その存在が支配権によって特色づけられるような状態である／になる」と定義する様に、「同盟によって特色づけられるような状態である／になる」を表すと理解される。今回見つかったヴェーダ語の用例を検討した結果、全ての用例において、具体的には冒頭に上げた様に「主語が対象 (*gen.*) との同盟に属している／属するものになる」ということを意味すると結論付けられる（→本稿5.2）。

5. *mitráṃ as/bhū* の用例検討、及びその具体的意味

ここでは、4 で示した *mitráṃ as/bhū* の *idám bhū* 構文としての構造理解、ならびにその意味を端的に証言する用例を確認する。以下の用例では先行する語句の説明に（ ）を、訳の補いに〔 〕を使用する。

5.1 *mitrām as/bhū* の構造の実例：文法上の不一致

- ① AVŚ XIX 15, 5-6 「安全と繁栄の為の章」 ≡ AVP III 35, 5-6 (*mitrām bhū*)

5: *ābhayaṃ naḥ karatīy antārikṣam ābhayaṃ dyāvāprthivī ubhé ime*¹¹⁾

ābhayaṃ paścād ābhayaṃ purāstād uttarād adharād ābhayaṃ no astu

6: *ābhayaṃ mitrād ābhayaṃ amitrād ābhayaṃ jñātād ābhayaṃ +paró yāh*¹²⁾

ābhayaṃ náktam ābhayaṃ dívā naḥ sārvā āśā máma mitrām bhavantu

5：中空は我々の安全（危険のないこと）を作るがよい。この天地両者は安全を〔作るがよい〕。

西から安全が〔あれ〕。東から安全が〔あれ〕。北から、南から我々にとって安全があれ。¹³⁾

6：同盟者から安全が〔あれ〕。敵から安全が〔あれ〕。知っている者から安全が〔あれ〕。遠く離れている者から安全が〔あれ〕。

夜にも我々の安全が、昼にも我々の安全が〔あれ〕。全ての領域たちは私との同盟に属するものになれ。

- ② TB III 8, 9, 2 「アシュヴァメーダ祭の章、馬への語り掛け」 (*mitrām bhū*)

yáyur nāmāsīty āha. etād vá áśvasya priyām nāmadhéyam. priyéṇaiváinam nāmadhéyenābhivadati. tásmād ápy āmitráu saṃgátya, nāmnā céd dhváyete, mitrām evá bhavataḥ.

「君は『駿馬』、という名である（と呼ばれている）」(VS 22, 19)、と彼は言う。これが馬にとって望ましい呼び名なのだ。当のもの（馬）に、望ましい呼び名によって彼は語り掛けることになる。それゆえに、二人の敵対者であっても、衝突して後、名によって呼び合うのならば、彼ら二人はまさしく同盟に属するものになる。

- ③ AB VI 20, 3-4「ホートリ系祭官の唱える讃歌について」(*mitráṃ as, mitráṃ bhū*)

tad u vaiśvāmitraṃ. viśvasya ha vai mitraṃ viśvāmitra āsa. viśvaṃ hāsmāi mitraṃ bhavati, ya evaṃ veda yeṣāṃ caivaṃ vidvān etan maitrāvaruṇaḥ purastāt sūktānām ahar-ahāḥ śamsati.

一方ここで聖仙ヴィシュヴァーミトラに関する「スークタが用いられる」。聖仙ヴィシュヴァーミトラは一切の者との同盟に属していたのだ。このように知っている者が、またこのように知って、諸々のスークタの前に昼毎これを唱えるマイトラーヴァルナ祭官を擁する者たちがいれば、その者にとって、一切の者は同盟に属するものになる。

用例①、②は、Gotō (1999: 137-138)¹⁴⁾ が指摘した、*idám bhū* 構文において見られる中性名詞単数対格 *idám* と動詞 *as/bhū* の数が一致しない現象が、*mitráṃ as/bhū* においても確認出来る用例である。①では neut. sg. nom.-acc. または m. sg. acc. *mitráṃ* に対し pres. iptv. act. 3. plu. *bhavantu* が、②においては、同じく *mitráṃ* に対し、pres. ind. act. 3. du. *bhavatas* が用いられている。また、意味的にも主語＝同盟関係そのものが成り立ちがたい。このことから、*mitráṃ* は主格述語ではなく、neut. sg. acc. として考えられる。

mitráṃ as/bhū の用法について。①、②に見られるように、主語が同盟；契約を締結する対象として、ほとんどの場合 gen. が用いられる。しかし、聖仙ヴィシュヴァーミトラに関する、③を含んだ2つの用例においてのみ、例外的に締結対象を表す際 dat. が用いられている。これらの用例はどちらも「ヴィシュヴァーミトラが一切のものの (gen.) 同盟に属する」「このように知っているものにとって (dat.) 一切のものが同盟に属するものになる」という2文を含み、前半で gen. で現れた *viśva-* が、後半で主語になった際には dat. で用いられている。同盟締結の対象であったものが主語になる際には dat. が代わって用いられるのか、単なる表現上のヴァリエーションなのか、あるいは他の理由によるのか、現状では決め難い。

5.2 *mitráṃ as/bhū*の具体的な意味の実例：同盟に「属する」ということ

- ④ TS VI 4, 8, 1-2 「ソーマ祭本祭、朝の圧搾の章『ミトラ・ヴァルナの為のグラハ』」¹⁵⁾ (*mitráṃ as*)

mitráṃ devā abruvant. sōmaṃ rājānaṃ hanāméti. sò 'bravīn: nāhám sārvasya vā ahám mitráṃ asmīti. tám abruvan. hánāmaivéti. sò 'bravīd. váraṃ vr̥ṇai páyasaivá me sōmaṃ śrīṇann íti. tásmān maitrāvaruṇám páyasā śrīṇanti. tásmāt paśávó 'pākrāman, mitráḥ sán krūrám akar íti. krūrám iva khálu vā eśāḥ //1// karoti yáḥ sōmena yájate, tásmāt paśávó 'pa krāmanti. yán maitrāvaruṇám páyasā śrīṇāti paśúbhir evá tán mitráṃ samardháyati paśubhir yájamānam.

神々はミトラに言った。「王であるソーマを我々は打ち殺そうじゃないか」と。彼は言った。「私はしない、なぜならば私はすべての者との同盟に属しているからだ」と。このように彼らは言った。「それでも、私たちは打ち殺そうじゃないか」と。¹⁶⁾彼は言った。「私は望みを選ぼう、他ならぬ乳によって、私の為のソーマを彼らは完全にするべし」と。それ故に、ミトラとヴァルナに属する〔ソーマ〕を乳によって彼らは完全にする（混ぜ合わせる）。そういう彼から、家畜たちは歩き去った、「ミトラであるのに、彼は残酷なことをおこなったぞ」と。ソーマを用いて祭式を行う者は、周知のとおり残酷に近いことを行うのだ。そういう彼から、家畜たちは歩き去る。ミトラヴァルナに属する〔ソーマ〕を乳によって完全にする、その時ミトラに家畜を獲得させることになる、祭主に家畜を〔獲得させることになる〕。

- ⑤ ŚBM IV 1, 4, 8 「(用例④TS VI 4, 8, 1-2と同様)」 (*mitráṃ as*)

tám páyasā śrīṇāti. tát yát páyasā śrīṇāti. vítro vái sōma āsīt. tám yátra devā ághnaṃs tám mitráṃ ábruvaṃs. tvám ápi haṃsīti. sá ná cakame. sārvasya vā ahám mitráṃ asmi. ná mitráṃ sánn amítro bhaviṣyāmīti. tám vai tvā yajñád¹⁷⁾ antár eṣyāma íty. ahám ápi hanmīti. hovāca. tásmāt paśávó

’pākrāman. mitráṃ sánn¹⁸⁾ amítro ’bhūd íti. sá paśúbhir vyàrdhyata. tám etád devāḥ paśúbhiḥ sámārdhayan yát páyasāśrīṇams. tátho eváinam eṣá etát paśúbhiḥ sámardhayati yát páyasā śrīṇāti.

ソーマを乳によって彼は完全にする（混ぜ合わせる）。乳によって〔ソーマを〕完全にする、そのことについて。ソーマはヴリトラであったのだ。彼を神々が殺したその時、そういうミトラに彼らは言った。「お前もまた打ち殺すのだ」と。¹⁹⁾彼は望まなかった。「私はすべての者との同盟に属しているからだ。同盟に属しているのだから、私はミトラでないもの（敵）となることはないでしょう」と。「そういう（そうすれば）お前を、我々は祭式から排除しよう」と〔神々は言った〕。「私もまた打ち殺す」と、彼（ミトラ）は言ったのだ。そういう彼から、家畜たちは歩き去った、「同盟に属しているのに、彼はミトラでない者（敵）になったぞ」と。彼は家畜たちを失った。乳によって〔ソーマを〕完全にした時、そのことによって、神々は〔ミトラに〕家畜を獲得させた。一方で〔今でも〕、乳によって〔ソーマを〕完全にする時、同様にそのことによって、〔祭主に〕家畜を獲得させることになる。

- ⑥ TS II 5, 2, 6-7「新満月祭の章『インドラのヴリトラ殺し』」（*mitráṃ as*）
sá ābhyám evá prásūta índro vr̥trám ahan. té devá vr̥trám hatvāgniśómāṃ abruvan. havyám no vahatam íti. táv abrūtām. ápatejasau vái tyáu. vr̥tré vái tyāyos téja íti. tè ’bruvan. ká idám áchaitíti. gáur íty abruvan. gáur vāvá sárvasya mitráṃ íti. sábravīt. //6// váraṃ vr̥ṇai. máyy evá sató ’bháyena bhunaḥjādhvā íti. tát gáur áharat. tásmād gávi sató ’bháyena bhuñjata. etád vā agnēs téjo yád ghrtám. etát sómasya yát páyo. yá evám agniśómayos téjo véda tejasvy evá bhavati.

そしてこの両者に鼓舞されて、インドラはヴリトラを打ち殺した。そして神々はヴリトラを打ち殺して、アグニとソーマ両者に言った。「献供物を、我々の為にお前たち二人は運べ」と。彼ら二人は言った。「こういう（我々）二人は、実に威光を離れた者達なのだ。ヴリトラにおいて、こんな二人の威

光はあるのだ」と。彼らは言った。「誰がこれ (*téjas-*) に向かって行くのか」と。「牝牛がだ」と彼らは言った。「牝牛はすべての者との同盟に属しているのだ」と。彼女は言った。「私は望みを選ぼう。他ならぬ私の中にこそ存在している両の者を、お前たちは〔*téjas-*として〕自らの為に役立てるがよい」。牝牛はこれを此方へ持ってきた。それ故に、牝牛の中の両者を彼らは役立てる。グリタというのは、これはまさにアグニの威光である。乳というのは、これはソーマの威光である。このアグニとソーマ両者の威光を知っている彼は、他ならぬ威光を具えている者になる。

④、⑤はパラレルである。ここでは、神々によるソーマ殺しにミトラが参加させられ、その結果家畜を失う、という話が展開される。

mitrá-「同盟」が体现する重要な概念として、「相手を傷つけない・害さない」ことがしばしば言及される。例えば⑥では *gáv-*「牝牛」が大きな役割を果たしており、アグニとソーマがヴリトラ殺しによって失った威光 *téjas-* を牝牛が取り戻しに行くが、その牛が選ばれる理由は「牛はすべての者との同盟に属しているのだ」からと説明されている。アグニとソーマが威光を失ったのは、おそらく④、⑤で家畜たちに歩き去られたミトラ神と同じく、(おそらくはヴリトラとの、または牛と同じようにすべての者との) *mitrá-* に属していたにも関わらず、同盟相手を殺す、または傷つけることに参画したことが原因と考えられる。傷つけないことと *mitrá-* との関連については本稿6で触れる。

④、⑤において、*mitráṃ as/bhū* の具体的な意味を考える上で問題になるのは、ミトラや家畜たちの言葉である。④では、一番最初のミトラの言葉においては *mitráṃ asmi* と *idám bhū* 構文が使われ、一方家畜たちの言葉においては通常の名詞述語文が使われている。同様の神話を描いている⑤では、最初のミトラの言葉や後半の家畜たちの言葉は *idám bhū* 構文が用いられている一方で、⑤に対応するカーンヴァ派テキストでは家畜たちの言葉が名詞述語文で表されている(注18)。Gotō (2002: 25, n. 6) や Amano (2009: 43)

が指摘しているように、*idám bhū* 構文が、*as/bhū* がコピュラ動詞として使われる以前の古い表現であるとすれば、TS の④にコピュラ動詞を用いた表現が現れ、より後に成立したと考えられる ŚBM の⑤に *mitráṃ as/bhū* の表現が現れるのは、文献成立の相関関係や方言を考える上で重要な点であろう。これに関係して、*mitráṃ as/bhū* の表現が RV では見つかっていない、という事実も挙げられる。

④、⑤及び⑥は *mitráṃ as/bhū* の意味を考える上で大きな役割を果たしている。Inhaltsakk. として理解した場合の *mitráṃ as/bhū* の基礎となる意味は後藤の指摘を元に 4.2 で触れた様に「同盟によって特徴づけられる状態である／になる」であり、その具体的な意味については用例を検討し判断していくことになる。例えば、西村（2006: 156）は、⑥における *gáur vāvá sárvasya mitráṃ* を「牛[というもの]はすべての事柄の契約を司っているのだ」と訳し、これは牛が貨幣価値を持っていたことに基づく表現である、という考えを示している。しかし、「管轄・支配する」という意味はあくまで *idám(rāṣṭrám) as/bhū* から導き出される意味であり、ここに検討した *mitráṃ as/bhū* の用例には適さない。また、④、⑤のミトラと牛たちの言葉、そして⑤のカーンヴァ派テキストでの記述からも明らかなように、*mitráṃ as/bhū* は、単なる名詞述語文 *mitráḥ as/bhū* と大きな意味の違いは認められない。さらに、本稿 5.1 ①、②を含め、現状筆者がヴェーダ文献から見つけた *mitráṃ as/bhū* の用例は、全て「同盟に属している／属するようになる」（すなわち「同盟に入っている／入る」）の意味を支持する。

6. *mitráṃ as/bhū* に見る *mitrá-* の含意：「互いに傷つけないこと」

5.2 で扱った④、⑤、及び⑥にも見られるように、*mitrá-* という語はしばしば、「傷つけない・害さないこと」、という含意とともに用いられているように見える。次の用例⑦では *mitráṃ as/bhū* であることがどういうことであるか明確に描写されている。

- ⑦ ŚBM V 3,2,7 「ラージャスーヤ祭の章『ミトラとブリハスパティへの供物』」 (*mitráṃ as*)

dvedhā taṇḍulān kurvanti. sá yé 'nīyāṃsaḥ páribhinnás té bārhaspatyā. átha yé sthāvīyāṃsó 'paribhinnás té maitrá. ná vái mitráḥ kām caná hinasti. ná mitráṃ kás caná hinasti. nainaṃ kuśó ná káṇṭako víbhinatti. nāsya vrāṇas canāsti²⁰⁾. sárvasya hy évá mitró mitráṃ.

諸々の玄米を彼らは二つにする（分ける）。そこで²¹⁾、よりこまかく砕けているもの達である方は、ブリハスパティに属する「もの達である」。そして、より大きく砕けていないもの達である方は、ミトラに属する「もの達である」。ミトラはどのような者もまた傷つけないのだ。どのような者もまたミトラを傷つけない。彼をクシャ草もとげも切り割かない。彼には「体の」傷²²⁾は決して存在しない。というのも、ミトラは他ならぬすべての者との同盟に属しているからだ。

用例⑦では、「ミトラはどのような者もまた傷つけないのだ。どのような者もまたミトラを傷つけない」ということの根拠が、「ミトラは他ならぬすべての者にとっての同盟に属しているからだ」であり、*mitrá-*とはお互いを害さない関係性であることが語られる。同様に既出の④⑤では、ミトラはソーマ殺しを持ち掛けられた際、「私はすべての者との同盟に属するからだ」と言って断っていたが、「お互いを害さない」ことが *mitráṃ as/bhū* 「同盟に属する／属するようになる」ことであるならば、ソーマも含むすべての者との同盟関係にあるミトラが、ソーマ殺しを断るのは当然のことである。また⑥では、牛が「すべてのものとの同盟に属する」からという理由で、ヴリトラの中へアグニとソーマの威光を取り戻しに行った。これはアグニとソーマとは違い、同盟関係にある牛は、ヴリトラに敵対することが無いという信用があるからだと考えられる。このように、*mitrá-*と「傷つけない・害さないこと」が関連付けられる用例は、*mitráṃ as/bhū* の用例中 9 例と半数以上のほる（① AV XIX 15,5-6；MS III 9,3:116,3-6；② TB III 8,9,2；TB II 2,7,39；

⑥ TS II 5,2,5-6 ; ④ TS VI 4,8,1-2 ; ŚBM II 3,2,12 ; ⑤ ŚBM IV 1,4,8 ; ŚBM V 3,2,7)。

7. 最後に

mitráṃ as/bhū は *idám bhū* 構文に合致する表現であり、*mitráṃ* は中性名詞単数対格であり、*Inhaltsakkasativ* として理解出来る。そして具体的な意味としては「主語が対象 (gen.) との同盟に属する／属するようになる」を表すと考えられる。既に触れた様に、*idám bhū* 構文に合致する表現は未だ研究の途上にある。理論的な構造分析だけでなく、この構文を取る具体的語彙やその用例の詳細な検討によって初めて個々の語彙における *idam bhū* の意味の現れ方が明らかとなり、今回の研究はその為の一助になるだろう。

また一方、*mitráṃ as/bhū* の用例検討は、*mitrá-*「同盟；契約」という概念自体の含意についても多くの示唆を与えてくれる。すなわち、④、⑤、⑥、⑦に現れているように、*mitrá-* はしばしば「傷つけないこと」と関連付けられていることが分かる。このように、*mitráṃ as/bhū* の用例検討は、*mitrá-* の語義を研究する際にも大きな役割を果たす。*mitrá-* の語はヴェーダの後にも使われ続ける重要単語・概念であり、仏教における *mettā-* 等の理解にも繋がる。文法の厳密な理解が文化的背景の理解にも繋がる好例と言えよう。

[注]

- 1) Thieme (1957: 18-20) がまとめているように、これまでの研究史においては、一般名詞 *mitrá-* を後代の文献におけるのと同様に「友人(男性名詞)・友情(中性名詞)」と訳すことがあったが、それは「同盟」の意味から派生した二次的なものであると考えられる。
- 2) Brereton (1981: 49-60) は、ミトラと昼、ヴァルナと夜の関係性と対比など、部分的には RV から引き継がれている機能もある一方で、ヴェーダ祭式理論における同一化の文脈に強く影響され、ヴァルナと対をなす為に元来ミトラには関係がなかった機能が多く付加されている点や、ミトラが RV では見られた恐ろしい側面

を失っていることを指摘している。

- 3) *as* と *bhū* の関係については後述の Hoffmann (1975, 1976) の議論を参照。
- 4) Hoffmann は、*idám bhū* 構文が見いだされる場所にそれぞれ *rāṣṭrām bhū* 「支配権に到達する」(MS III 3,7: 40,7 等)、*ayám rāṣṭrām syāt* 「彼が支配権であるように＝彼が支配権を所有するように」(同上)、といった訳を当てている。
- 5) Gaedicke (1880: 156) (訳は堂山による) は Inhaltsakk. を「…今論じようとしている対格の概念は、行為と同時進行である——始まりから終わりまでそれに伴う——だけでなく、行為そのものと完全に一致し、それに内在する。(中略) 内容の対格としての対象は、それ自身で出来事とは別に存在していたり、出来事に際して存在していたり、あるいは出来事のあとで存在するのでもなく、その出来事とだけしか現れない。したがって、内容の対格は人物ではありえず、原則として行為を表す実体名詞が立ち、一つの出来事を表現する。…」と表している。Delbrück (1888: 168-169) が例示するように、同族目的語による Inhaltsakk. としては *jítim jayati* 「勝利を勝つ＝勝利する」や *viṣṇukramán kramate* 「ヴィシュヌの歩みを歩む＝ヴィシュヌのように歩む」が挙げられ、同族語でない場合としては *dūtyām yāti* 「伝令を行く＝伝令に行く」や *ghṛtām arṣati* 「バターオイルを流れる＝(水が) バターオイルの様に流れる」などがある。
- 6) Gotō (1999: 137) も参照。
- 7) 本稿用例⑥ TS II 5,2,5-6: …*gáur vāvá sárvasya mitrá*m…」に対して。
- 8) 本稿用例⑦ *sárvasya hy évá mitró mitrá*m. に対して “Mitra is the ally (mitrá) of everyone” と訳出している。また、例えば本稿用例④ *nāhám sárvasya vā ahám mitrá*m *asmi* に対し Keith (1914: 534) は “Not I; for I am the friend of all” としている。
- 9) 聖仙ヴィシュヴァーミトラに関する用例においてのみ、「誰か／何か (nom.) が誰か／何かにとって (dat.) 同盟に属するようになる」と dat. を取る用例が見つっている。現状意味上の違いは明確には分かっていない。本稿 5.1 検討部及び用例③を参照。
- 10) 例えば、PW は neut. sg. nom.-acc. *mitrá*m が副詞として用いられている箇所を取り上げていない。
- 11) *imé* : PS III 35, 5b (Ed. D. Bhattacharya) では無し。
- 12) 写本は全て *puró yáh*。これに対し Sāyaṇa は *yah paraḥ* とし、「知人以外の者」「よく知らない者」と説明する。Ed. Roth/Whitney/Lindenau は *paróḥṣāt* に校訂している。いずれにしても、a *pāda* 「同盟者 :: 敵」と同様の対比が、b *pāda* でなされていると考えられる(「知っている者、馴染みの(＝近くにいる)者 :: 見知らぬ者、遠く離れている者」)。本稿では、Sāyaṇa の理解同様 *paraḥ* と読むが、その際 *páraḥ* (*pára*-nom. sg.) と *parāḥ* (adv. 「遠くに」; この場合述語的副詞) のいずれも可能である。本稿では修正が最小限になるものとして後者を採用した。一方、写本通りであれ

ば *puró yáḥ*「前方（目の前）にいる者」となる。

- 13) Whitney (1962: 922-923) は *paścād* ('from behind'), *purástād* ('from in front'), *uttarād* ('from above'), *adharād* ('from below') としている。Sāyana は本稿と同様に方角として理解している。
- 14) 後藤 (2007: 807); Gotō (2008: 122) も参照。
- 15) ソーマ祭は、覚醒・興奮作用のある植物ソーマの朝昼晩三回の圧搾と神々への献供、祭官達での喫飲を中心とする大規模な一連の祭式。詳しくは後藤 (2008: 72-73) を参照。またグラハ *grāha-* はソーマを汲み取る杯、汲み取ったソーマ、または汲み取りの儀礼のこと。
- 16) 勧誘を意味する接続法。接続法の意味と用法に関しては堂山 (2005: 102-107) を参照。
- 17) ŚBK V 1,4,8: *somapīthād*「ソーマの喫飲から」
- 18) ŚBK V 1,4,8: *mitráḥ sánn*
- 19) Delbrück (1888: 278-279) が説明するように、会話文においては、話し手の意思を表す接続法、またはその意味を負う未来形が使われるべき箇所、直説法現在が使われることがある。
- 20) *nāśya vrāṇaś canāsti* は ŚBK VII 1,2,7 には無し。
- 21) Delbrück (1888: 215-216) が触れるように、*sá* は本来の代名詞の機能を離れて文をつなぐ小辞としても機能し、その場合、当箇所のようにはや主語と性数が一致しないこともしばしば起こる。
- 22) *vrāṇa-* : (体の) 傷、負傷。EWAia, PW どちらも ŚBM V 3,2,7 の用例を登録していない。なお EWAia は Bd. 3 に *vrāṇa-* を収録し、用例は Mn, ep. + としている。

略号表

一次文献

RV = Rg-Veda

AV = Atharva-Veda (Śaunaka-recension)

AVP = Atharva-Veda (Paippalāda-recension, Kashmir)

PS = Atharva-Veda (Paippalāda-recension, Orissa)

MS = Maitrāyaṇī Saṃhitā

TS = Taittirīya-Saṃhitā

AB = Aitareya-Brāhmaṇa

ŚBM = Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina-recension)

ŚBK = Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva-recension)

TS = Taittirīya-Saṃhitā

文法用語その他

acc. = accusative act. = active adj. = adjective adv. = adverb

br. = brāhmaṇa (内容としてのブラーフマナ)

dat. = dative du. = dual gen. = genitive ind. = indicative iptv. = imperative

m. = masculine n. = neuter neut. = neuter nom. = nominative plu. = plural

pres. = present sg. = singular

参考文献

[一次文献]

RV

Ed. Aufrecht, Theodor. *Die Hymnen des Rigveda*. Herausgegeben von Theodor Aufrecht. 2 Bde. 2 Auflage. Bonn: Adolph Marcus. 1877.

AV

Ed. Roth/Whitney/Lindenau. *Atharva Veda Sanhita*. Herausgegeben von R. Roth und W.D. Whitney. Dritte, unveränderte Auflage (nach der Max Lindenau besorgten zweiten Auflage). Bonn: Fred Dümmers Buchhandlung. 1974.

AVP

Ed. Raghu Vira. *Atharva Veda of the Paippalādas: conspectus of Śaunaka and Paippalāda, Paippalāda verse-index*. Delhi: Arsh Sahitya Prachar Trust, Distributors: Meharchand Lacchmandas, Dryagang, New Delhi. 1979.

PS

Ed. D. Bhattacharya *The Paippalāsa-Saṃhitā of the Atharvaveda*. Critically edited from palmleaf manuscripts in the Oriya script discovered by Dugamohan Bhattacharyya and one Śāradā manuscript. 4 vols. (volume 1: Consisting of the first fifteen Kāṇḍa, volume 2: consisting of the sixteenth Kāṇḍa, volume 3: consisting of the seventeenth and eighteenth Kāṇḍas, vol.4: consisting of the nineteenth and twentieth Kāṇḍas). Bibliotheca Indica Series No. 318 – 319. Kolkata(Calcutta): The Asiatic Society. 1997, 2008, 2011, 2016. (Revised edition volume 1: Kolkata: The Asiatic Society 2017).

TS

Ed. Weber, Albrecht. *Die Taittirīya-Saṃhitā* (Indische Studien 11-12). Herausgegeben von Albrecht Weber. 2 Bde. Leipzig: F. A. Brockhaus. 1871-1872.

MS

Ed. Schroeder. *Maitrāyaṇī Saṃhitā*. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. 4 Bde. Leipzig: F. A. Brockhaus. 1881, 1883, 1885, 1886.

AB

Ed. Aufrecht, Theodor. *Das Aitareya Brāhmaṇa*. Mit Auszügen aus dem Commentare von Śāyaṇācārya und anderen Beilagen herausgegeben von Theodor Aufrecht. Bonn: Adolph Marcus 1879 (Repr.: Hildesheim: Georg Olms, 1975).

TB

Ed. Mysore. *The Taittiriya Brahmana with the Commentary of Bhattabhaskaramisra* (Government Oriental Library Series. Bibliotheca Sanskrita, 36). Ed. by A. Mahadeva Sastri, R. Shama Sastry and L. Sriniasacharya. 4 vols. Mysore: Government Brach Press. 1908-1921 (Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass, 1985).

ŚBM

Ed. Weber, Albrecht. *The Çatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākhā with extracts from the commentaries of Śāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedaganga*. Edited by Albrecht Weber. The White Yajurveda, pt. 2. Berlin: Dümmler–London: Williams and Norgate. 1855(Repr.: Chowkhamba Sanskrit Series 96, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1964).

Ed. Kalyan-Bombay. *Shrimad-Vajasaneyi-Madhyandin-Shatapath-Brāhmaṇam with Vedarthaprakash commentary by Shrimat-Trayibhashyakar Sayanacharya, and Sarvavidyanidhana Kavindracharya Saraswati Shri Hari Swami*. Edited by several learned persons. 5 vols. Kalyan-Bombay: Gangavishnu Shrikrishnadass. 1940.

Ed. KāśīSkt.Ser. *Śatapatha Brāhmaṇa of the white Yajurveda in the Mādhyandina Recension (Complete Volume) together with comprehensive Brāhmaṇa Index, Critical Introduction and Notes* (Kāśī Sanskrit Series 127). 2nd ed. Varanasi: Chawkhambha Sanskrit Sansthan. 1984 (3rd ed. 1998).

ŚBK

Ed. Caland, W. *The Śatapatha Brāhmaṇa in the Kāṇvīya Recension*(Punjab Oriental Series 10). Edited for the first time by W. Caland. Revised by Raghu Vira. 2 vols.. Lahore: Motilal Banarsidass. 1926, 1939(Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass, 1983).

[二次文献]

Amano, Kyoko. *Maitrayaṇī Samhitā I-II: Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Bremen: Hempen Verlag. 2009.

Böhtlingk, Otto. u. Roth, Rudolph. *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 Bde. St. Petersburg: Buchdruckerei der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. 1855-1875. →PW

Brereton, Joel P. *The Rgvedic Ādityas* (American Oriental Series vol. 63). New Haven, Conn.: American Oriental Society. 1981.

- Delbrück, Bert(h)old. *Altindische Syntax* (Syntaktische Forschungen IV). Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisengaus. 1888.
- Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*. Teil 1. Straßburg: Karl J. Trübner. 1893.
- Gaedicke, Carl *Der Accusativ im Veda*. Breslau: Verlag von Wilhelm Koebner. 1880.
- Gotō, Toshifumi. “Notizen zur altindischen und avestischen Syntax” In H. Eichner, H. C. Luschützky, V. Sadovski ed., *Compositiones Indogermanicae in Memoriam Jochem Schindler*. Praha: Enigma Corporation. 1990. 127-142.
- “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums —anhand des Altindischen—” *Indogermanische Syntax —Fragen und Perspektiven—*. Herausgegeben von Heinrich Hettrich unter Mitarbeit von Jeong-Soo Kim. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag. 2002. 21-42.
- “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *śālām as* im Śatapatha-Brāhmaṇa” In L. Kulikov, M. Rusanov ed., *Indologica: T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*. Book 1. Moscow: Izd-vo RGGU. 2008. 115-125.
- Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background* (Veröffentlichungen zur Iranistik herausgegeben von Bert G. Fragner und Velizar Sadovski NR. 60.). in co-operation with Jared S. Klein and Velizar Sadovski. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. 2013.
- Hoffmann, Karl. “Zum Prädikativen Adverb.” *Münchener Studien Zur Sprachwissenschaft*. Heft 1. 1952/1956. 42-53.
- Aufsätze zur Indoiranistik*. Herausgegeben von Johanna Narten. 3 Bde. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag. 1975, 1976, 1992.
- Mayrhofer, Manfred. *Etymologische Wörterbuch des Altindischen*. 3 Bde. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag. 1992, 1996, 2001. → EWAia
- Thieme, Paul. *Mitra And Aryaman*. (Transactions of the Connecticut Academy of Arts and Sciences. vol. 41). New Heaven, Connecticut: The Connecticut Academy Of Arts And Sciences from the Yale University Press. 1957.
- Whitney, William Dwight. *Atharva-Veda Samhitā; Translated, with a critical and exegetical commentary*. Second half. Harvard Oriental Series vol. 8. Cambridge, Massachusetts: Harvard University. 1905.
- 後藤敏文「荷車と小屋住まい：ŚB śālām as」『印度学仏教学研究』55-2. 2007. 809-805.
- 「古代インドの祭式概観 ―形式・構成・原理―」中谷英明編『総合人間学叢書』第3巻. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2008. 57-102.
- 堂山英次郎「リグヴェーダにおける1人称接続法の研究」大阪大学文学研究科紀要第45巻-2. 大阪大学文学研究科. 2005.

「サンスクリット語のむこう側—ヴェーダ語の世界— 3. 河が蜜を流れる——同族対格と内容の対格 堂山英次郎(大阪大学)」リベラルアーツ検定クイズ.
https://la-kentei.com/kotoba_news/?category=8 (最終閲覧日: 2022 年 12 月 2 日).
2022.

西村直子『放牧と敷き草刈り: Yajurveda-Samhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究』東北大学出版会. 2006.

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

A Study on Construction of *mitráṃ as/ bhū* as *idám bhū* in Vedic literature

Minori TSUZUKI

Vedic literature, written in the oldest Indian language of Sanskrit, contains a particular grammatical expression of the *idám bhū* construction. Nominative subject and neutral singular noun *idám* [nominative/accusative] structure this construction, and it uses the verb *as/bhū* [be/become], which is ordinarily used as a copula. In the instances of gender, number, and case, there are a few differences between nominative subject and *idám*. Furthermore, *idám* and such subjects could not have the same meaning. Hence, researchers distinguish *idám bhū* construction from general predicative expression (X is Y). In preceding studies, it has been clarified that the primary meaning of *idám bhū* construction is “subject[X] exists or comes to exist, by being featured by *idám*”, and *idám* is not used as predicative nominative noun nor adverb, but used as Inhaltsakksativ is the accusative which represents meanings of verbs. Frequently, some neutral singular words which relate to laws or social systems, can adapt to *idám bhū*. However, there remain many questions on the functions of each neutral singular word in *idám bhū*, and the meaning held by *idám bhū* with each word.

The Vedic word *mitrá-*, which means alliance or treaty, is also be used as “*idám*” in *idám bhū*. Certain examples of this usage were already present in Vedic literature. Therefore, the author sheds light on the construction of Vedic literature’s *idám bhū*, accompanied by *mitrá-*, *mitráṃ as/bhū*, by gathering all 15 examples. In conclusion, the author discovered the use of *mitrá-* as Inhaltsakksativ in all examples. Subsequent research shows that, *mitráṃ as/bhū* specifically implies that subject [X] allies or comes to ally with object [Y] expressed in the genitive case. In addition, research clarified that the alliance represented by *mitrá-* mainly implies that, allies will not injure each other.